視る眼を、瞑ります

納 平子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
視る眼を、瞑ります

【Ｎコード】
Ｎ７０１８Ｄ

【作者名】
納　平子

【あらすじ】
「――――死戯〔ゲーム〕をしよう、『視通す者』よ」この世の全てを“視通す”能力を持つ憑物は、普段と変わらない夏休みを過ごしていた。とある日の深夜、憑物は自分を殺しに来た人物から一通の手紙を受け取る。宛名は、過去に憑物が“壊した”霊能力者のもので、憑物は霊能力者と命懸けの“死戯”をすることになる。…『視通す者』憑物と『天邪鬼』亞木姜示が遭遇する運命の一夜。『視る眼』シリーズ第二部です。このお話は、眼を瞑っていては“視”れません――――…。

記憶の欠片〈上〉

これは、自分がまだ子供と呼べる年代の頃の記憶だ。

――なあ、××××。
今日のテストはどうだった？　僕はいつもの通り、百点さ。つまらないよなぁ、大学レベルの問題だって解けるってのに。こんな低学年のこんな低レベルの問題なんて、解いてる時間があるなら世紀の大発明してる方がよっぽど有意義だよ。ていうのは言葉の綾で、大発明してるよりかは遊んでる方が俄然意義はあるけどね。

当時の友人は、亞木姜示唯一人。
かつて神童と呼ばれていた彼は、その生まれ持った数多の才能に恵まれ過ぎて、人生に鬱屈していた。
いや、鬱屈という程、塞ぎ込んでいる訳でもないが。
言うなら、退屈している、が正しい。

――何か楽しいことは無いかなぁ。
僕の人生を根底から引っくり返すような、仰天奇天烈摩訶不思議な楽しい楽しい一大イベント！　オマケにペロペロキャンデーがついてきたらもう文句無しだね。…キャンデーは要らない？　あれ、××××ってキャンデー嫌いなの？　あー、それは頂けないなぁ。今度駄菓子屋に行った時に食べさせて上げよう。……要らない？

あっそ。

人生に退屈していたのは俺も同じ。全てを“視通す”ことが出来る俺は、この頃、既に世界に現存する相当数の知識を網羅していた。知らない時は知的好奇心、探求心を満たしたいが為に手当たり次第に視通してみたが、知ってしまうとなんてことはない。さらなる知識の欲求に掻き立てられ、それを知ったとしても満たされはせず、延々に、永遠に求め続けた。
求め続けて、そして飽きた。

世の中にあるもの全てが、つまらなく思えるようになってしまった。

――なあ、××××。また“視る眼”を貸してくれないかい？
アレって最高に最上に便利な能力だよ。この世の全てを視通せるってんだから。

亞木はこの能力を便利な能力だと言った。
この世にあるもの全て、他人の心も、現在も、過去も、未来も、あらゆる次元のあらゆる異世界も、何もかもを見透かし、視通し、知り尽くせる。
便利な能力だ。
何でも知れるのだから。
何でも視れるのだから。

何でも。

何でも。

何でも。

……何でも？

――うん？　地獄？　何だ、まだ視てなかったのか。勿体ないなぁ、それは是非にとも視ておかなきゃいけない最重要事項の一つだろう。あ、なんだったら僕に視せてくれないかい？　駄目？　…あ！　僕が言ったから今から視るつもりだな！　ズッルイぞー！　ズッルイぞー！

地獄。

この世で生ある者が死した時、咎人だけがそこへ送られ、浄化されるあの世のこと。

悪に浸り切った者達が懺悔し、心から救いを求め、改めさせる清浄の世界。

そういう場所だと、俺は思っていた。

罪人が悔い改める為の世界だと。

果てなく続く拷問の限りをその身に受ければ、

天上の世界へ逝ける。そういう仕組みの世界なんだと、

畜生共がもがき苦しむ姿なんて視ても、対して面白いものなんて無いだろうと、

その時の俺は、思っていた。

……。

――――んー？　どうしたんだい、××××××。なーんだかやつれて見えるぞ？　栄養足りてないんじゃない？

亞木が少し可笑しそうに、少し心配そうに聞いてくる。

――――悪いものでも食べた？　あっちゃー、道端に落ちてるもの食べたらいけないってあれほど言い聞かせてたでしょう！　……
…あれ？　おーい、××××××ー？　そこは突っ込むところだぞー？

亞木の声が変に頭の中で残響する。

亞木の声が酷く心を掻き乱して胸がムカムカする。
亞木の声が素晴らしく脳髄を侵してフワフワする。

地獄を視た。
地獄と呼ばれるモノを、視た。
この身体に、この世の全ての痛みを受けた。

壮絶だった。
最悪だった。
気持ち悪かった。
内臓や骨、筋肉を口からズルズル引き抜いて、空っぽになった身体におぞましい虫をギッシリ詰め込んだようなおぞましい感覚。
手も、足も、首も動かせず、身動き出来ない俺の身体の内側を虫が

蠢き、
喰い破り、這う。
わらわらと、いたぶる。
じわじわと、苦しめる。

辛い。
痛い。
苦しい。
苦々しい。
抜け出したい。
でも抜け出せない。
止められない。
逃げられない。
逃げては、ならない。

――――え？　地獄を視せてやるって？　どうしたの××××、随分気前が良くなったじゃん。

俺はその日“壊れた”。

地獄を“視”て。

地獄という名の、地獄を。

こうなるということを、“視通せず”に。

だから、思った。

だから、考えた。

だから、実行した。

――――それじゃ、お言葉に甘えようかな！　ほら、手を触れば……

……、

亞木、姜示の手を取って、

『神童』亞木姜示に地獄を“視”せて、

“どうなるかを、視通して”、

その日、

俺は亞木姜示を、

コワシタ。

〈壱〉1　日常的な非日常

憑物、と呼ばれる少年がいる。

本名不明、偽名として日央凪臣（ひおうなぎおみ）という名を使ってはいるが、本人は自分に合っていないとのことで使用は控えている。

彼は『視通す者』だ。

森羅万象、この世のみならず、ありとあらゆる異世界を、時空を、事象を越えて視通し、視透かし、視定める。神の如き能力の使い手だ。

異端なる能力。それゆえ、トラブルに巻き込まれることが常となる。望む望まぬに関わらず、異常な事態に追いやられてしまう。

今回はその異常が女の子だった、というだけの話。

朝。

眼が覚め、欠伸をし、さて夏休みをどう過ごそうか宿題でもするかしかし面倒だかったるいんだやってられるかとか愚痴愚痴言いつつも、憑物にはやはり隣の物体をないがしろにすることは出来ない。

有り得ないことが起こるのが、憑物の日常だ。

なので、ツインベッドで寝そべる憑物の隣で、白シャツ一枚の女の子が寝ていたって驚くことはない。むしろ喜ぶべきだ。
…世間の眼が冷たくなるので、間違っても喜んではいけない。戸惑うくらいがちょうどいい。

「まあ、今更な気もするけどな…」

状況の異常さは置いといて、憑物は一先ず女の子を起こすことにする。

「おい、起きろ」

「……」

反応はない。しかばねのようだ。

「……起ーきーろ」

「……」

肩を揺すっても反応はない。仲間になりたがっているようだ。

「……起きろ！　卯月える！！」

「…、」

女の子は起き上がった。憑物の仲間になった！　チャーチャッチャッチャラー♪

「……で、お前はそこで何をしてる？」

「ヒハ？　いやいやちーと実況解説」

いつの間にか憑物の背後に立ち、ＲＰＧ風に語っていた男はヒハヒハ笑った。

橙色に染めた短髪に顔中ピアス、リングだらけの、憑物と同年の少年。

『天邪鬼』亞木姜示（あぎきょうじ）。

「ヒハハ！　ヒハハハハハハ！！」

亞木は何が面白いのか、憑物と、憑物が卯月えると呼んだ女の子を交互に見比べながら、

「つっきーがイタイケイケな女の子を埒々拉致ちゃってるー！　ランランル～ヒーハハハ。ケーサツ！　ケーサツ！　変態さんをお巡りさんにツーホーだ～♪　ヒーヒハハッ」

端から見れば確かに憑物が女の子を監禁しているように取れる現場を吹聴しながら、軽やかなスキップで玄関を出ていった。

登場して一分も経っていない。彼は一体何しに此処へ来たのだろうか。

「……天邪鬼はいつも元気だなぁ」

寝起きで低血圧な憑物はまともに相手にする気にもなれなかった。

欠伸を一つして、亞木が閉めずに行ってしまったので蝶番の軋む戸を閉じ、再び卯月えるの方へ向き直った。

ベッドでは、起きたばかりのえるがじっと憑物を見上げている。寝惚けているのか、半眼で視点はおぼつかない。

物言わぬ闖入者を前に、憑物はどうするかを考えた。———起きて間もないしとにかく面倒だ。“誰かを演じるのは止めて”、単刀直入に聞くことにしよう。

「える。お前が何しに此処へ来たのかは視ってる。誰に連れて来られたのかもな。俺を利用したいのも判るし、俺も利用されてやる」

「……」

憑物が話し掛けても、えるはずっと黙ったままだった。感情の起伏が感じられない。まるで死人を思わせる。
憑物は構わず続け、

「望みを言えよ。叶えてやる」

「……たち」

促してやると、えるは初めて開口した。
たち、と。
…立ち？

「……立たせろってか？」

「……（こくん）」

えるは頷いて両手を憑物の肩に載せる。望みを言えと言った手前、手を払う訳にもいかない憑物もえるの腰を掴んで持ち上げる。
小柄な身体なので、難なく立たせることが出来た。次に、

「……すわ」

…座？

「……座らせろって？」

「……（こくん）」

身体を持ち上げ、えるは足を折り畳んで、憑物はそっと降ろしてやる。

最後に、

「……ね」

「……寝？」

「……」

えるはベッドに横になって、二度目の就寝を

「寝るな！」

「……」

手刀を頭に振り降ろしたが起きなかった。

マイペース全開。手強いな、どう対処しよう、と憑物は頭を悩ませ、

「…うん。俺も寝直そ」

思考を放棄してベッドに突っ伏した。

「……」

「……」

夏の陽射しが厳しくない、ある冷夏の日の朝の出来事。
お互い初対面。えるの方は住居不法侵入、憑物は幼女監禁（？）。
なのに二人仲良くご就寝。
そんな極々ありふれているようで、実際ありふれていたら社会問題に発展するような一日が、憑物にとっては本当にありふれたいつも通りの一日が、
つつがなく、始まった。

〈壱〉2

昼。

憑物は近くのコンビニエンスストアに出向き、朝食兼昼食を買いに来ていた。

空腹に堪えかねて、ではない。

憑物は空腹にならない。“地獄”を視て壊れた影響か、人の三大欲の内、睡眠欲以外の二つが欠落しているせいだ。買っている品も、アパートに残してきた卯月えるに与えるものが大半を占めている。人一人分の食料と、絶食期間一ヶ月突入しかけていたので私用に栄養食もカゴに入れ、レジで会計を済ませようとカウンターに向かう。カウンターには店員が一人、憑物が来るのを笑顔で眺めていた。

憑物が近づくと店員は、

「…」

わざとらしく脇に置かれた商品に眼を移した。憑物もつられてそちらに視線を向け、その商品に注目する。

「肉まん、半額…」

およそ今の季節に合わない、異彩際立つ商品だった。

七月中頃、いつまでたっても夏らしい気温にならない、ならそれを逆手に冬の定番を売り出そう、珍しさで客が食いつくぞ！　と店長が豪語し見事売れ残ったものだ。見ていて心切なくなってくるのは、狙いを外した店長の哀愁が乗り移っているからか。

「…」

カウンター越しに立つ店員が、肉まんに興味を示した憑物を標的に、
チラチラ覗きみる。
視線が語る。

――お客様、買いですか？

店員は買って欲しいそうだ。
が、憑物はしれっとして、

――見てるだけ。

カゴを持ったまま、その場仁王立ちで肉まんを見続けた。
しばらく、憑物と店員との間で静かな駆け引きが行われる。

――買うんでしょ？

――いいや。

――買いたそうな顔してるじゃない。

――見てるだけだ。いくら冷夏でも、夏に肉まんはない。

――ならさっさと会計済ませたら（雑）。

――いや待て焦るな落ち着こう。これって賞味期限大丈夫？

――黙秘。

――眼を逸らすな。ヤバいんだな？　駄目なんだな？

――買って確かめたらどうすか。

――そこで投げやりになるな。当たったらどうする。

――当選、おめでとうございます。

――まだ当たってねぇ。

――チッ。ちゃっちゃと決めろや意気地がねえな。買いたいんだろ？　食いたいんだろ？

――食い…たくないといえば嘘になる気もなくはないが、

――買えよ。

――やだ。

――なんで。

――負けた気がする。

――ある意味勝者だぜ。

――どっちかというと挑戦者だろ。

――皆誉めるよ。英雄だよ。

――直後にトイレ直行の英雄て。

――頑張れよ勇者。

――何を頑張れと。

――だーいじょうぶ。自分もさっき食ったよ。

――結果は？

――ＣＭの後で。

――当たりか…。

――当たったよ。ああ当たったともよ大当たりさ。立ってるだけで精一杯さそうさ俺は英雄さ。英雄という名の冒険者さ臆病な君と違ってねぇ！

――…。

――なあ、もう良いだろ。

――…俺は。

――いこうぜ。ピリオドの向こうへ…。

――俺は……ッ。

――寂しがり屋の伝説を、創るんだ。今こそ！

――う…………うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉおッッッ。

「邪魔だからそこ退いてくんない？」

げし、と。

決断に迫られた憑物を足蹴にして、黒髪の少女がレジの前に立った。腰を容赦なく蹴られた憑物は顔をカウンターの角にぶつけ、痛みで身体をくねらせる。少女は悶絶する憑物には眼もくれない。店員はいきなりのことでおろおろ、憑物を気に掛けて、

「早く、しなさいよ」

「お会計はこちらになります」

一睨みで憑物を見捨てた。人間とはかくも薄情な生き物だと憑物は再認識した。

少女は店員に金を渡し、平然と店内を後にする。緊迫感漂っていた空気は和らぎ、回復した憑物は恨みがましい眼で店員を一瞥。店員は苦笑いしながらアイコンタクトで、

――ところで、肉まんは

――元から買う気はない。

相手にもされなかった。おまけに会計を始めようとする前に乱暴にカゴを奪われ、万札数枚を横暴に手渡されて足早に立ち去られる。終始ジト眼で睨まれて。
店員は少し、どころかかなりいたたまれない気持ちになって、己れの頼りなさと不甲斐なさを恥じ、お客様を見捨てたことを大いに反省したが別に憑物も怒ってはおらず単に意地悪しただけなので店員に合掌。
落ち沈むアルバイターを無視して憑物も店を出る。コンビニ付近、道路を横断している少女を見つけ、そちらに向かって歩き出した。少女に大事な用があったから。
用というのは、不意打ちで蹴られたことではない。あの場面で蹴られることは視っていたし、そんなことでいちいち腹を立てる憑物でもない。ただ、憑物は少女に対して、一言言わなければならないことがあった。
黒革のジャケットを来た少女は、遠目でもやたらに目立つ。動向を観察していると、少女は歩道を渡りきる手前まで進んでいて、信号機も点滅。憑物が渡る時間はないので追いつけそうになかった。否、追いつく必要はない。声の届く範囲まで近づければ、それで良かった。
たった一言、少女に伝えられれば良いのだから。

「不阿波累李（おおあばるいり）！」

憑物が声を上げて少女を呼ぶ。
横断歩道を渡りきる寸前、少女は声のした方へ、憑物に振り返ってあからさまに不審な眼を向ける。お互い、親しい仲でもないし、というより先程の運命的な邂逅が初顔合わせなのだから、自分の名を視っている憑物を訝ってもそれは仕方ないことだ。
それよりも、視通した通りの展開となったので、憑物は少女に伝え

なければならないことを告げる。
少女にとって生死に関わる、重要なことを。

「止まると危ないぞ」

止まると、危ない。
少女は憑物の不可解な伝言を聞いて、

左手から走ってきたスクーターバイクに撥ね飛ばされた。

運が良かった。
バイク運転手は直前で少女に気づき、避けきれないと判った時点で自ら転倒して直撃を回避、少女の方も反射でバイクの慣性に従って飛び、衝撃を和らげた。
結果、少女も運転手も軽傷で済み、大事故には至っていない。

…そもそも憑物が呼び止めなければ、事故が起こること自体なかった筈だが。

そのことを聡明にも理解した少女は、事故を目撃して駆け寄ってきた有象無象を蹴散らして憑物を捜した。
憑物はといえば、少女が跳ねられた時点で邪悪にほくそ笑み、さっさと姿を眩ませて。

小一時間、猛り狂った少女は街中を探し回ったが、遂に憑物を捉えることは出来なかった。

〈壱〉3

◇◆◇◆◇

今日は朝から最悪だった。

買い込んでいた酒は切れた上、家にいる筈のアイツは何処にもいない。

散々探したがもぬけの殻。俺は苛ついて、部屋中暴れて物を壊した。

酒が欲しくなったから外に出掛け、行きつけの酒店に寄るものの、愛飲している酒は在庫切れ。

店の主人に罵声を浴びせても気は収まらない。安酒を一升買って帰りがけにがぶ飲みし、ぶつかる相手全員に絡んで怒鳴った。

途中、記憶が、曖昧になる。

気づくと、薄暗い路地のごみ置き場。身体は腐った生ごみにまみれて臭い、誰か数人が俺を取り囲んで笑っている。

不良か族にでも喧嘩を売ってしまったんだろう。腫れて見辛くなった眼から軽薄そうな男を眺め、ぼんやり思った。

最悪だ。

あの日以来、俺の人生はドン底だ。

同情も慰めも貰えない。それはそうだ。全部自分で招いたことだから。

今ではもう、昔の自分がどんなに誠実で謙虚だったかも忘れてしまった。

家族を第一に考えていたあの頃を、過去へ置き去りにしてしまった。

妻は亡くなり、アイツは死んだ。

全部、俺のせいだ。

どうしてこうなったんだ。

“あの日”さえ来なかったら、こうはならなかったのか。

時を遡って人生をやり直す術があって、“あの日”をやり直せば、少しはましな道筋になったのか。

やり直すことさえ出来れば、また、あの頃の幸福を取り戻せるのか――、

「下らないな。お前」

…？

目の前に、さっきまでいなかった少年が俺を見下ろしていた。

毒々しい程真っ赤に染めた長髪をオールバックにした少年。

俺を取り囲んでいた連中は消え、少年の握り拳に血が付いている。

彼が追い払ってくれたのか。

酔狂だな。放っておけばいいのに。

「その顔、その眼、同情してもらいたいのか？　下らない奴だ」

赤髪の少年が見下したように言ってくる。

同情？

そんなものは誘ってない。嘘だ。

俺は俺のしたことを悔いてる。反省してる。責めている。

同情されたいと思う権利が無いことを、誰より自分が知っている。
人を見透かしたような眼で見やがって。何なんだこいつは。

「下らない。下らなすぎて、反吐が出る」

うるさい。

お前に何が判る。

大切なものを自分の手で壊した、俺の気持ちなんて。

憶測だけで語っている癖に、いい気になるな。

俺の気持ちは、俺だけのものだ。

お前なんかに、知られてたまるか。

「まあ、いい。俺には関係ないことだからな。ただ」

そうだ。

関係ない。
ほっといてくれ。
俺の前から消えてくれ。
もう、俺に構うな――――、

「お前は、目障りだ」

え？

少年の手が、
俺の首を掴んで、
片手で持ち上げて、
怪力で、
互いの目線が合わさって、
凍りついた、冷めきった眼が俺に殺意を向けて、
――――下らない、と吐き捨てた。

…最悪だ。

今日は特に、厄日だ。

こんな汚物まみれで、こんな危ない奴に出くわして。

今にも殺されそうな、自分がいる。

お似合い、といえばお似合いだ。

抵抗したいとも思わない。幸いまだ酒が残っているのか、痛みも息苦しさも鈍い。楽に死ねる。

俺には生きる価値もない。こいつが俺に引導を渡してくれるなら、むしろ感謝すべきか。

嗚呼―――、意識が遠のいていく…。

ごみ溜めの中で、ごみ溜めのような人生に幕を引くんだ……ハ、ハ、ハ。笑え、る。

もう、すぐそこだ…。

楽になりたい…。

向こうへイッたら、謝らない、と…。

あ……同じ場所には、イケないか…。

俺がイくのは、ジゴク、だろう、から…。

……、

……、

……。

「――いが、斑鳩鎮六。そい――すのは――の役――や、ない」

……ッ、

声、が。

赤髪の奴と、違う？

「なん――の名を知っ――。――呼、おま――、――のか」

首を絞めていた握力が、なくなる。

重力に引っ張られて、またごみの中に逆戻り。衝撃で薄れていた意識もはっきりした。

辺りを窺う。

路地には、赤髪ともう一人少年が増えていた。

不健康過ぎるくらい痩せ細った少年だ。何処にでもいそうな顔立ちなのに、細まった眼には異様な色が見え隠れしている。

痩せた少年は、赤髪の少年と何か話し合っていた。

知り合いなのか、痩せた少年は赤髪を斑鳩鎮六（いかるがしずむ）と呼び、斑鳩と呼ばれた少年は、彼を憑物と呼ぶ。偽名だろうか？

程なく、赤髪は俺に興味をなくし、痩せた少年に近づいてボソボソ囁いた。表情からすると、凄んでいるらしい。

と思えば、赤髪は少年を殴り飛ばした。

いつの間に殴ったのか、見えなかった。皮と骨だけのような少年は

汚れきった路地を滑って、青色のポリバケツにぶつかって止まる。

ふん、と赤髪は鼻を鳴らし、また俺に視線を移した。今度こそ殺すのか、と覚悟を決め、俺は待つ。

「……下らない。とんだ茶番だ」

赤髪は、そう言い残して去っていった。

何なんだ、一体。絡まれているところを助けたと思ったら殺そうとして、邪魔が入ったから止めた？

訳が判らない。彼は何がしたかったんだ。

俺は、助かったのか。

死なずに済んで、喜べば良いのか。

死ねずに終わって、ガッカリすれば良いのか。

「どっちでも同じだよ、卯月茂（うづきしげる）」

！

痩せた少年が、立ち上がって俺に話し掛けてきた。

殴られた頬も気にしないで、薄ら笑いを浮かべながら、俺の方まで歩いてくる。

待て。そんなことより、なんで俺の名を？

前に一度会ったのか？

記憶にない。

覚えていられるか。酒に入り浸った毎日を送っていたんだ。最近の記憶だって曖昧なのに。

なら、この少年とは何処かで会ったことが

「無いよ。お前とは、此処で会うのが初めてだ」

…、

……、

……は。

おかしい。あり得ない。

俺は、今、喋ったか？

言葉を、口に、出したか？

心の中で、考えた、だけじゃ、ないか？

「お前が混乱するのも無理はない。自身の内をまさぐられるなんてそうそう体験することではないし」

俺の疑問に答えるように喋る。

勿論、俺は無言のまま。

俺の考えを見通して、独り言のように言葉を紡いでいる。

こいつは、

「憑物。日央凪臣、でも良い。『視通す者』と『道化師』というのもある。好きに呼べ」

憑物。

どういう意味なのか。

日央凪臣、というのが実名らしく聴こえるが。

それと『視通す者』。

視通す……俺の考えを、視通す？

「詮索はしなくていい。どのみち、お前はもうすぐ壊れるんだからね」

そう言って、少年は屈み、顔を近づける。

その視線が、俺の全てを、射抜く。

「さて。“私”が此処へ来た理由は単純明快、卯月えるの件についてだ」

な……ッ。

なんで、アイツの名前を。

お前が、知ってる？

「くふふ。そう恐い顔をしないでくれ。あの屍は私の住まいに置いているよ。危害は加えてないから、安心するといい」

アイツが、お前の、家に？

お前が、連れ、出した？

「連れてきたのはどこぞのドレッドだ。まあ、それは脇に置いて、その卯月えるが私のところへ連れてこられたのは、お前のせいなんだよ、茂」

俺の、せい？

「そう。三年前、お前がえるにした行為。えるにしてしまった過ちのことだ」

あやま、ち。

「三年前。お前の人生が狂いに狂った年だ。忘れた訳ではないだろう？」

忘れる、訳がない。

忘れ、られるか。

「そうだ。忘れられるものか。家族一辺倒で、誰より、何より家族を想っていた頃を、どうして忘れられる」

そう、そうだ。あの時の俺は、妻とアイツを幸せにすることだけを考えていた。

普通に見合いで知り合い、普通に式を挙げて共に過ごすと誓った、妻。

数年して、初めて妻が身籠り、生まれたアイツ。

順調で、障害もなく、平凡過ぎる人生。刺激も何もない、退屈な日

々だったが、充分幸せな、毎日。

俺は、それを、一生涯掛けて守ると、誓ったんだ。

「だけど、その誓いは破られた」

……。

「あの年、あの時、あの場所で、――――強盗が現れたその日から、ねぇ？」

……うるさい。

「そうそう、その日はえるの誕生日だったか。お前は早めに仕事を切り上げ、プレゼントに兎のぬいぐるみを買って帰ったんだ」

黙れ。黙ってくれ。

「帰ったお前を待っていたのは、惨劇を越える惨状だった」

やめろ……それ以上、俺の過去を視透かすな！

「妻は、腹を刺されて死んでいた」

――――ッ。

「傍らには、妻を殺した男が、お前を眺めた」

う、ああ、

「妻の腹から刃物を抜き取って、男がお前を殺そうとした。その時、お前は何をした？」

う……ぅあああああああ！！！

「命乞いだ」

あ。

「妻を殺した男に、頭を垂れて、どうか助けて下さいって、頼んだ」

あ、ああ、違う、違ッ、

「何が違う？　茂、嘘は無意味だ。私にはね。当時の状況を誰より、当人のお前より視っていると自負するよ」

違う！

だって、だってッッ、

……あんな状況になったら、誰だってそうするだろ！！

それが“普通”だろ！！！

「…」

死が迫ってたんだ。殺されるんだ。だから命乞いした。何が悪い！

「悪くはないさ」

誰でも同じことをした。俺だけじゃない。お前だってそうだろ！？

「どうだろうね」

俺は悪くない。悪くない。悪い訳がない！！

俺は、俺がしたことは、“普通”のことなんだ！　だから、だからッ、

「じゃあ、その後にえるにしたことも普通かな？　あれも、追い詰められれば、誰もがそうしたと？」

ッ、

「強盗が逃げて、残されたお前は、隠れていたえるが出てきたことに驚いただろう。一部始終見られた。母殺しの男にすがった父親…クハハ、その時のえるの感想を教えてやろうか？　ん？」

うるさい。黙れ。それ以上。喋るな。

黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙

「お前を、憎んでいたよ」

…。

「憎んで、呪って、そして愛した。愛したんだ。どうしようもなく愚かなお前を、ね」

愛、した。アイツが？

この、俺を？

「そうだよ。そして赦そうとまでした。仕方なかったと。お前のしたことは赦されるべきだ、と」

そんな……嘘、だ。それじゃあ、それじゃ、

「それを知ることのなかったお前は、えるを殺した」

それ、は

「いたぶって、いたぶって、いたぶりぬいて。最期に、えるは自分の心を殺した」

それは、そんな……。

「その日から卯月えるは、逝ける屍と化した」

そんな、こと、俺、は……。

「同情も誘えないね。憐れ過ぎて掛ける言葉もない。お前は心の何処かで、あれは自分のせいではないと、思っていたんじゃないか？」

同情。

そうか……だから、赤髪の少年も……、

「確かに妻が殺されたのはお前のせいではないよ。でも、えるは違

うだろう。えるを殺したのは、紛れもなく、お前だ」

そう、だ。

俺が、アイツを、殺した。

ハハ、ハハハ、ハ……。

笑え、ないな。

「さて、そんな救えないお前に朗報だ」

……朗報？

なんだ、朗報なんて、もう要らない。

俺は俺の罪を認めたんだ。そんな奴に、朗報なんて。

「救済と断罪。どちらかを選べ」

少年の手が、
俺の顔を覆った。
…救済？
……断罪？
お前が、俺を？

「救いか、裁きか。私の能力ならそれが可能だ。お前を死なせず、視なせる」

死なせずに、視なせる。
どういう、意味だ。
判らない。
何もかもが、どうでもいい。
此処で朽ち果てたい。妻と、アイツに、報いたい。
報い……。
……。

…あ。そういうことか？

お前が此処へ来た理由。

その為だけに、来てくれたのか？

「厳密には、えるが望んだことだ。あの屍の願いを叶える為、と思ってくれ」

そうか。アイツが望んだのか。

それは良かった。

じゃあ、今日は厄日じゃない。人生最良の日になる訳だ。

「いや、最善だろう」

最善か。

最悪、の日々から、解放される、なら。

最善、なんだろうな。

「で？　救済と断罪。どちらを選ぶ」

どちらを？

そんなもの、初めから決まってる。

俺が選ばないといけないのは、たった一つだ。

ずっと、ずっと、選ばなければならなかったのに、そうしなかった、俺。

今なら、選ぶことが、出来る。

「救済か、断罪か」

救いか、裁きか。

答えは、一つだ。

たった、一つだ。

それで、終わり。

俺の、平凡で、つまらない、普通の、人生を、終わらせる、それは。

その選択肢は、

〈壱〉4

夕方。

宰蓮寺氏乃（さいれんじしの）は、とある女の子を連れて、とある裏路地に足を運んでいた。

まさか自分の人生にこんな薄汚い場所へ訪れる機会があろうとは想像だにしていなかった彼だが、命令なので不満は洩らさなかった。

命令を下したのは、宰蓮寺が仕える人物の息子、憑物。

路地についた彼を待っていた憑物は、一人の中年の上に腰掛けていた。

憑物の視線には、宰蓮寺が連れてきた女の子、卯月えるがいる。彼女は憑物のアパートからこの路地に来るまでの間一言も喋らず、表情も変えず、宰蓮寺に従ってついてきた。そして今も同様、無表情で憑物に乗られている父親をじっと眺めている。

白眼を剥き、ぴくりとも動かなくなった父親を、無心で見ている。

「える。望みは叶えたぞ」

父親の衝撃的な姿を前にして顔色一つ変えないえるに、憑物が声を掛けた。

えるは聞こえたのか聞こえなかったのか、二人の傍まで歩み寄り、憑物を無視して卯月茂だけを見下ろす。

再起不能になった父親。

えるを殺した張本人。

今では立つことも話すことも不可能となった、憐れな男。

卯月えるは、そんな男に対しても、何も想わない。

「…こんな結末でも、駄目なものは駄目か」
意味深なことを呟いて憑物は腰を上げる。えるとすれ違って宰蓮寺に近づくと、宰蓮寺は眼鏡のズレを直しながら、
「お疲れ様です。凪臣様」
偽名で憑物を呼んだ。
憑物の本名は当然知り得ている宰蓮寺だが、間違っても憑物の名を呼ぶようなことはしない。
そんなことをすれば、卯月茂と同じ末路を辿ることになる。
「ご苦労さん。いつも通り、施設に送っておいてくれ」
「ご家族には、なんと」
「茂は親類縁者とは長く疎遠だ。俺と同様、な。消息を絶っても誰も気にしない」
「…判りました」
憑物は淡々と事後処理を命じる。
人一人の人生を破壊したばかりだというのに、罪悪感を毛ほども感じていない。
たまに宰蓮寺は、憑物に感情というものはあるのかと疑うことさえある。
心が死んでいる、卯月えるのように。
「失礼なこと考えるなよ、氏乃」

「！」

考えを視透かされた。
宰蓮寺は僅かに硬直して、その姿から怯えた子犬を連想した憑物は笑った。

「そうびくつくなよ。お前を壊したりはしないって」

「は…」

「うん。まだ壊さないから」

「……」

壊す予定はあるようだ。
リアクションの取りようがなくて困る宰蓮寺、取り敢えず今の発言は聞かなかったことにして、えるの処遇はどうするかを訊ねる。
返答は、粗雑でそっけないものだった。

「ほっとけ」

「放っておくのですか。ですがそれは」

「死にはしない。そこらをさ迷って野良暮らしするさ」

家から逃げ出したペットみたいな言い種だ。無責任にも程がある。
せめて託児所に預けるなりなんなりすべきだと宰蓮寺は考える。えるはまだ十歳にも満たない子供で、放置すれば数日内に死体で発見されること必至だ。
柄ではないが、こちらで一応の処置は取ろう、そう宰蓮寺は決めて、

卯月えるに視線を移して、

「…？」

えるの姿がないことに気づいた。

卯月茂が倒れている辺りに、隠れられるような物は置かれていない。

憑物と話す間に路地を出ていったのか。

諦めきれない宰蓮寺は携帯電話を取り出し、周囲に配置してある監視員に連絡を取ろうとする。常に憑物の近辺を巡回、警護する彼らは、路地を抜けたえるの動向も把握している筈だ。

「無駄だけどな」

発信履歴から監視員の一人に通話を繋げようとし、憑物の言葉で手を止めた。

宰蓮寺は憑物を見て、

「アレはもう亡霊だ。お前達一般人には手に負えない。良いから、大人しくしておけ」

「……はい」

『視通す者』の言葉に気圧され、従わざるを得なかった。

「じゃ、後を頼む」

忠告を素直に聞いた宰蓮寺に満足げに笑んで、憑物は家路につこうと踵を返す。

「……凪臣様。一つ聞いても宜しいでしょうか」

「んー？」

歩き出して間もなく、宰蓮寺から呼び止められた。
憑物はそうなると予め視っていたのですぐに止まり、宰蓮寺に耳を貸す。

「彼女、卯月えるは、心を亡くしているんですよね」

「そうだ」

「ですが、先程凪臣様は卯月えるに対して、望みを叶えたと仰いました」

「言ったな」

「矛盾していませんか？　心が亡いなら、何かを望むことも出来ないのでは」

「その通りだよ」

あっさり認めた。
もう少し渋られるかと気構えていた宰蓮寺は拍子抜けして、

「それともう一つ」

折角なので、さらに疑問に思うことを打ち明けた。

「わたくしはこれまで凪臣様の生活、動向を逐一把握していましたが、今回の凪臣様の行動には、これまでのような一貫性がありませ

ん」

「…」

「凪臣様は全てを“視通し”ます。視通して、その上でその身に起こる出来事に自身の意思を介入させずに、流れに身を任せていました」

起こった事柄に必ず沿って動く、それが憑物だと宰蓮寺は言った。
例を挙げるなら、先月、憑物になんの縁もない女性が、憑物が原因で悪霊に憑き殺された一件。
女性が殺されることを視通していた憑物は、視りつつも止めようとはせずに見殺しにしてしまった。
結局その後、第三者の手によって自縛霊となった女性と憑物は接触、否応なく女性を成仏させることで救ってやったのだが、
女性が殺されると視った時にそれを避ける手段を講じていれば、そもそも悲劇が生まれることはなかった。
憑物が動いていれば、女性は死なずに助かったかも知れない。いや確実に助けることが出来た。
なのに憑物は動かなかった。
それが“流れ”に反する行動だったから。

「何故、凪臣様がそんな生き方をしているのかは私には判りませんが、そうすると本日の凪臣様の行動にも矛盾が生じてしまいます」

「矛盾なんてあったか？」

白々しく、憑物はとぼけてみせる。
宰蓮寺は緊張した面持ちで、もう一歩踏み込んでみた。

「昼に出会った少女をわざわざ追い掛け、事故に遭わせたのは不自然です。いつもなら、対人恐怖症と偽ってやり過ごすでしょうに、何故少女に関わったのですか？　卯月家族の問題にしても、自ら足を運んで解決するのはおかしい。“卯月えるは貴方に何も頼んではいなかったのに”。…何故、今回に限ってこのようなことを？」

運命を運命のままに受け入れ、その為に自分とは違う誰かを演じてきた憑物。
それが、この日だけは自分を偽らずにいた。
自らの意思を率先して、積極的に赤の他人と接触している。
それは何故なのか。
特に深い意味はなく、単に興味本意なだけの宰蓮寺だったが、知りたかった。
その問い掛けに、憑物は。

「そうだな…」

しばし考える仕草をして、考えるまでもなく決まりきった答えを出した。

「所詮、口約束だから守る義理はない、てところか」

「は……？」

省略し過ぎで意味は伝わらなかった。
なのでかいつまんで判りやすく、宰蓮寺も納得のいく理由を付け足した。

「その前に、氏乃はどうして俺にそんなことを聞くんだ？」

「それは、ただの興味ですが」

「正直だな」

「嘘を言っても視破られるでしょう」

「それはそうだ。じゃあ俺も正直に言おう。氏乃と同じ理由だよ」

「同じ？」

「氏乃が疑問に思ったことは、つまりなんとなくだろ？　それと同じってこと」

「ただの、気まぐれだ」

〈壱〉４（後書き）

〈壱〉日常的な非日常、終わりです。

頭のネジを百本ほど締め直し、錆び付いた部品を七百余り取り替えて書き直しました。今までよく壊れなかったな、自分。

〈壱〉は憑物の普段の様子を書いてます。憑物は作中のような行動をいつもやっているんだよー、と。一つ違うのは、憑物が妙に積極的ってところです。

書き直し前の〈壱〉は、キャラに焦点を置きすぎて長くなっていたので、要らないところを省いて省いてチョイナチョイナとしたらこんなに短くコンパクトに。持ち運びに便利ですよアラ不思議。

では、〈弐〉赤紙と招待状　に参ります。累李を先に出したので、こちらも内容がかなり変わりますよ。ではでは、今しばらくお待ち下さい。

〈弐〉1　赤紙と招待状

夢ニ溺レヨ。

偽リニ身ヲ浸セ。

過ギ去リシハ、淡キ想ヒ出ノ――――。

◇

◆

◇

◆

◇

――初めまして。私は『管理者』、＝＝＝＝＝といいます。

貴方は×××××ですね。『視通す者』、私と同じ能力の持ち主。

今日は折り入ってお願いしたいことがあって来ました。少し、時間を頂けますか？

本来なら、私と貴方は出逢ってはいけないんですけれどね。でも、貴方の最近の行動には目に余るものがあったので。

帰れ？　まだ来て五分と経っていないじゃないですか。もうしばらくお話をしましょう。お互い、同一である存在は他にいないのですから。

ウザイ、ト思ッタ。

―――こんにちは。…そんな、邪険に扱わなくても良いじゃないですか。私が来るのが迷惑ですか？　……即答されると流石に傷つきます。

不毛などではありませんよ。貴方には運命を変えうる能力があります。私にも運命を操る能力があります。けれど、その能力は不安定なんです。貴方だって、

あら、今日はお友達もいるんですね。…天邪鬼さんですか。初め……、

×××××さんは凄いですね。私はあの人のテンションにはついていけないです。気疲れします…。

目障リ、ダッタ。

———世界を管理する、と言っても、そう大それたことはしていません。元の道筋と現在進行の道筋が違ったら、それを補正する。それだけです。

ある程度の差異は問題にならないですよ。未来はあくまで不特定多数に別れていますから、そのどれかを進んでも構いません。ですが、特に未来を知る、或いは視ることの可能な存在には細心の注意を、

…すみません。口が過ぎました。貴方は理解している。した上で、そうしているんですものね。忘れて下さい。

余計ナコトバカリスル、女ダッタ。

――――学校の帰りですか？　私もご一緒させて下さい。

テストの点数は満点ですか。問題を読んで、答えを視て、答案用紙に書き込む……カンニングペーパーいらずっていうのは便利ですけど、視通す能力をそういう風に使うのは…。

ご存知の通り、私は学校に通っていないんですよ。私の母国は宗教間の紛争が酷かったので、学校なんて……。

×××××さんの通う学校に、私も通うのはどうでしょう？　クラスも同じになるように根回しして……冗談です。そんな、本気で嫌がらないで下さい。

ナニガ、愉シイ？

――――こんばんわ。何をしているのですか？　…それでは、お月見でもしませんか？　××××さんはゆとりを持った方が良いと思います。

フフ、最近は此処に入り浸っているせいで、皆が怒るんですよ。容認してくれる人もいるんですけれど、他は心配し過ぎでノイローゼになりかけてて。

確かに夜半、女子が男子の元へ訪れるのは不純ですけれど、×××××さんはそんな悪いことしませんよね？　……しませんよ、ね。

月が綺麗ですね。あらゆる界を繋ぐ星門、その輝きが紅く揺らめく刻、二つは一つになる…。

詩的に言ったつもりはないです。笑い過ぎですよ。…そんなに可笑しかったですか？

それでは、おいとまします。お茶をありがとうございました。

また、逢いましょう。私達は、同じく『視通す者』なのですから。

何故、マタ逢ウ。

逢ウ必要ハ、無イ。

オ前ハ、俺ニトッテ。

俺ニ、トッテ。

――――どうしたんですか、××××××さん。機嫌悪そうですけど…。

何を……キャウッ！？　××××××さ……止めてくだ……。

わた、しの態度が、気に入らない、んですね。全てを視っていて…
知らない、振りをする、のが……。

視って、いまし…たよ。今日、この時間に逢いにくれば、こうなる、
という……ことを。ですが、

不毛、などでは、ありません。そうしなければ、界……ひず……
……う。

わ……たし……は、あな…に、視……、

×××…×さ、ん……。

呼ブナ。

呼ブナ。

ソノ名ヲ、

呼バナイデ、

———おはようございます、憑物さん。

理解は……やはりしてくれませんか。まあ、視通した通りの結果ですね。

良いんです。それでも貴方は、私と同じ道を歩んでくれるのですから。多くを望めば、バチが当たります。

×××……いえ、憑物さん。もう一度、約束してくれませんか？

ええ、これ以降、私は憑物さんの前に姿を現しませんから。最後の別れとして…。

別レ。

別離。

別々。

…死別。

――誓って下さい。道しるべから外れぬよう、刻の流れに逆らわぬよう、

無限にも広がるあらゆる世界を、その全てを、

いつまでも、いかなるときでも、私と共に視守るように。

現世の限りを、視届けますように。

視届ケル。

オ前ト、

俺ノ、

二人、デ。

ソレガ、約束。

ワタシト、キミトノ、

———友愛の契りを、結ばんことを。

親愛ノ約束ヲ、守ランコトヲ———。

〈弐〉2

「……最悪だな」

夜。

ボロいアパートのボロい部屋の、空間を圧迫するツインベッドのその上で、憑物は悪態を吐いた。
朝から昼に掛けて長時間二度寝したのが原因か、唯一無二の欲求である眠気すらやってこなかった憑物は、ゴロゴロ寝返りを打ったり、冴えまくった眼を閉じて羊さんとペーターをちまちま数えたりと苦心して三時間後のことだ。羊よりもペーターが増えすぎて脳内が混沌と化しつつあった頃、やっと浅い眠りにつけたのだが、
苦労して寝ついたというのに、憑物は夢を見るやいなや自力で意識を覚醒させて起きてしまった。
憑物にとって、見たく、視たくもないものを不覚にも見てしまったせいだ。

「あー…前もって判ってただけに嫌気が差すな。くそ」

上半身を起き上がらせて、自分自身に毒づく。
あの夢を見ることは百も承知していたのに。
承知の上で、夢を別の内容に変えてしまおうと考えていたのに。
珍しく“流れ”に逆らおうとしたせいなのか、上手くことを運べな

かった。
憑物らしくない、失態だ。
「……あれから八年と二日、十七時間五十九分五十七秒、八、九、
……十八時間ジャスト、と」
手のひらで顔を拭くのを片手間に、ボソボソ時間を数える。
本日は二００七年八月四日、深夜零時丁度。
それから八年と二日、十八時間前は、一九九九年八月一日明朝六時。
世界の終焉を予言された日の翌日。
『彼女』の存在が消えた、日だ。
「馬鹿らしい。何がいつまでも、いかなるときでもだ。自分だけさっさと殺されてれば、世話ないだろうが」
憑物は口元を歪めながら、冷めた物言いでひとりごちた。
寝覚めが悪い。なにか気晴らしにと暗い部屋を見渡し、開け放してある窓に視線を移す。
ベランダから覗く空には、平坦に拡がる雲が月や星を隠して見えなかった。
あの少女と一緒に見上げた紅い月は、もう何処にもない。
「……寝よ」
起きていても陰鬱な気分は払拭されないと判断し、憑物はベッドに戻った。
涼しい風がそよぎ、夏の風物詩は一つも聴こえず、
静かに、鎮まり、沈んだ時間が流れた。

「……」

耳鳴りがしそうな程の静寂。
憑物はやがてゆったりと息を吐いて、胸を上下させて、ゆるりと眠りについた。
無音が部屋を埋め尽くして、生ける者全てが夢の中に誘われたその空間に、雲が途切れて顔を出した月の明かりが射し込む。
部屋は照らされ、暗闇が薄れていく。

人一人分の影を残して。

「…」

黒づくめの男が、立っていた。
男は無音のまま、風の流れも乱さず、そこにいた。
憑物の真上。
身体を跨いで立ち、冷淡な眼差しで憑物を見下ろす。
左手には刃渡り二十五ｃｍのナイフ。
月光を受け、鈍く光るそれを両手で構え、男は膝を下ろす。
シーツに僅かなシワが寄る。それだけで、膝のついた部分は窪みもせず、ベッドは小揺るぎもしない。まるで男には体重がないのではと錯覚させた。

「…」

憑物は起きない。
ナイフの先端が憑物の喉に突きつけられる。
重力に任せて手を降ろせば、それが致命となる。
簡単な行程。
容易い所業。
少しつまらなく思いながらも、男は気を弛めず、確実に、憑物を殺す――――…、

「ざーんねん」

ビクッと、男の肩が跳ねた。
降り下ろそうとした自分の腕、その手首がいつの間にか握られている。
就寝した筈の憑物に、凶刃を遮られている。
驚きを隠せない。
気配は絶っていた。
殺気が漏れたか。
しかし、
「無駄無駄。俺の方が速かった。…お前はもう終わりだ、井和木（いわき）」

「ッ」

悪寒に襲われる。
男は名を呼ばれ、瞬間一足飛びで後退、ベッドから離れる。
距離を取り、対象の出方を窺い、

「怖がるなよ。化け物を視た訳じゃ、ないんだ」

背後から、声。
ベッドは、もぬけの殻。
何故、という疑問。
自分より速く、ベッドを離れた？
この対象は、何者？
依頼主は、ただの高校生だと。
変鉄のない少年の暗殺など、裏があると訝ってはいたが。
一体、これは。
コレは、

「チィッ！」

ナイフを逆手に持ち変えて、振り向き様に振り抜く。
外しはしない。男はプロだ。それこそ正確に、これこそ確実に、対象を一撃で仕留める。
肉が裂け、血が滴り、痛覚に顔を歪める。
刃は心臓に食い込んだ。感触が伝わった。
終わった。
依頼を遂行した。この少年が何者なのか知らないが、死んでしまえば関係なくなる。
そう、関係ない。

関係ない。
関係ない。
もう、オレがシんでも、カンケイない。

「……」

ナイフが抜け落ちた。
吹き出るチ。
床と金属がぶつかる。
男は動けない。
動かせない。

「何……？」

血を流しているのは男の方。
胸の中心に開いた傷を、信じられない表情で見つめる。
自分自身で、刺したのだ。
振り向き様に、対象を刺そうとして、
自分を、刺した。
自殺だ。
自害だ。
自分を、終わらせた。
終わった。
これで、終わり。
関係ない。関係ない。関係ない。
これで、もう、ダレモ、ボクヲ、

「待て待て待て。何だ？　僕？　ぼくだと？　何を言っている。ぼくじゃない、ボクジャナイ。俺は、おれだ。オレナンダ。オレハ、ボク、デ？　イヤ、イヤ、イヤイヤイヤ、オレ、オレオレトボクハ

？　オ……ボク、ハ。ダレ、モ、」

ダレモ、
ダレモ。
ダレモ？

モ　ウ　、　ダ　レ　モ　、　ボ　ク　ヲ　、　イ　ジ　メ　ナ

「夢に溺れろ。他人に侵されろ。心逝クマデ視ニ晒セ」

「オ、ォォアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッツ！？？」

〈弐〉3

ナイフが落ちた。
憑物と距離を取ってしゃがんだまま、男は動かなくなる。全身から汗を流して、荒い呼吸で、白眼を剥いて小刻みに震えている。
横たわったままの憑物は起きてベッドを降り、悠々と男に近づいた。
落ちたナイフを拾い上げると、二、三度器用に手の中で回転させ、パシッとグリップを握る。
汗だくの男の真横で止まり、逆手に、両手で持って、男が先程しようとしたのと同じ方法でナイフを降り下ろす。
男に止める術はない。
降り下ろされた刃は頭蓋を破り、脳を裂いて、神経を断絶して息の根を止める。
男の人生が、終わる。
それが流れに反することと、憑物は視りながら、

「御待ち下さい、日央様」

玄関口から、声がした。
刺し貫く寸前だったナイフは止まった。
男を殺すつもりでいた憑物はふうと息をつき、声の主を向く。
台所の横、玄関の前に立っている、一人の少女を捉えた。
朱い巫女服を着用した、あどけない顔の少女。
容姿、形状、どこをとっても完璧な、“造られた”人。
人形という紙に精霊、鬼神を宿して使役する古来よりの術。それによってこの世に存在を許された、非実の現実。
『式神』だ。

「どうして止める、搭燈(とうひ)。こいつは使い捨てだろ？」

憑物は式神の名を呼ぶ。
精神を侵されている男、井和木のように視通して、ではなく。
憑物は、式神・搭燈と出逢ったことがある。

「申し訳ありません。主はその方の処遇については何も御指示されておりません故、私の独断で御頼み申し上げております」

搭燈は慇懃な口調でもう一度憑物に伝えた。憑物の言う通り井和木は搭燈の、否、搭燈の『主』にとって捨て駒同然。わざわざ名乗りでてまで殺すのを止める必要はない。
式神が暗殺者を助ける理由、その訳を視る憑物は、いやらしい笑みを貼りつけて核心を突く。

「目の前で人が死ぬのは、もう見たくないか」

「…」

沈黙。
認めたようなものだったが、搭燈は能面を崩さずに御願いします、とだけ繰り返した。
飽き足りた反応を示され、憑物は退屈そうにナイフを退ける。
…ことなく井和木の二の腕に刺し、ポンと肩を叩く。ナイフを刺されても無反応な井和木は、肩を叩いた途端にビクリと跳ねて立ち上がり、ふらつきながら搭燈を素通りして玄関を出ていってしまった。
それを眺めた搭燈はほんの少しだけ眼を細め、憑物は肩を竦めておどけた。

「殺してないぞ？　時間の問題だろうけど」

「……お変わりの、ないようで」

「クハハ、誉め言葉として受け取っておこう」

悪びれることなく、笑った。
実際、憑物は井和木を殺していないし、殺すつもりもない。でなければ、アパートの外に宰蓮寺を待機させて井和木を保護させたりしない。
これは、単に搭燈への嫌がらせなのだ。
過去の忠告を無下にした、愚かな式神への罰だと憑物は嘯ぶくだろうが。
まさしく最悪、だった。

「…で、お前が来た理由は、これだな」

搭燈の冷ややかな眼差しを受け流し、憑物は何処からか一枚の紙を取り出した。三つ折りにされたそれは井和木の懐に忍ばせてあったもので、ヒラヒラ見せびらかすと搭燈の眼に冷静さが取り戻された。

「それを、何時？」

「井和木が立ち上がった時だよ。さて、」

憑物は紙をかざす。
井和木本人に秘密裏に託された、憑物への手紙。
内容は把握済みなので読む必要はなく、つもりもない憑物は手紙をビリビリに破いてベランダから投げ捨てる。
憐れ役目を果たせなかった紙屑は風に吹かれ、紙如きに情を抱かない憑物は窓を閉めて搭燈に伝言を頼んだ。

「西洋被れの陰陽師に伝えろ。俺は天邪鬼しか連れていかないから、そっちの数を減らすか枷でも考えておけってな」

「……」

また沈黙。

主を西洋被れと称したのが気に入らなかったのか、しかし搭燈は怪訝そうな顔をして、食い入るように憑物を見つめた。

「どうした？」

「……演技を、為されないのですね」

不思議に思ったこと。

過去、これまで誰かを演じ、物語の中でシナリオ通りに動いていた憑物。

誰も知ることのないシナリオを視ることが出来るのに、決してそのシナリオを乱すことなく道化を演じてきた男。

そんな男が、好き勝手に動いている。

暗殺者、井和木の対応は仕方なくとも、受け取った紙は実際に眼を通すのがこれまでのやり方。

読みもせず、破いて捨てて、なのに紙に書かれた内容に沿って会話を展開するのは、不自然極まりない。

宰蓮寺氏乃と同じく、搭燈も頭を悩ませた。

憑物としては、演技をするのはとある少女との約束であって必ず守らなければならない訳ではないから、演技をしないだけなのだが、勿論、憑物はそんなことを教えはしない。

適当にはぐらかす。

「構うな。面倒なだけだ」

「そう、ですか」

歯切れの悪い受け答えだった。
不服なのだろう、かつて憑物と関わり、“シナリオ通りに演じられた結果、主を失ってしまった”のだから。
あの日あの刻、憑物があんな事をしなければ、
自分達はあんな思いをしなかったのに。
『片割れ』はいつもそう罵っている。
だから、誰彼を演じる生き方をしない憑物には、『片割れ』は怒るだろうし搭燈も釈然としない。
許し難い、行為だ。

「お前達も、変わらないな」

「…」

憑物が哀れむような眼で搭燈を視る。
紙如きに情を抱かない癖に。
愚かで、故に自身の存在を貶めた、馬鹿な精霊を責める為に。
あの日あの刻、散々思い視らされたのにこうしてこの場にやってきた搭燈を、苛むように。

「…失礼させて、頂きます」

主の文は、破り去られたが憑物に届いたので、搭燈はその場を後にしようとした。
逃げ、なのは搭燈本人が一番理解している。それでも早くこの場から立ち去りたかった。
憑物のいる空間から、抜け出したかった。

それを赦してやる程、憑物は優しくはなかったが。

「一つ、良いことを教えてやる」

頭を下げ、一礼した搭燈に憑物が言う。
近い未来において、自分を罰する機会を搭燈に示してやる。

「案内するなら俺を選ぶのが無難だ。天邪鬼はやめておいた方が良い」

「…畏まりました」

一礼のままで言葉を受け取った。
言葉の意味は、搭燈にしか判らない。それによって搭燈がどういう行動を起こすのか、それは憑物にしか判らない。
どちらを選択するか。
提示されたその時点で、選ぶ権利はないに等しかったが、
搭燈は敢えて自分の意思だと主張して、胸の内で憑物にしかと返答をして、
霧か霞のように、姿を暗闇の中に消し去った。

〈弐〉4

（私は、悔いてはおりません、か）

搭燈がいなくなり、部屋には静寂が戻った。
眠気もバッチリ無くなった憑物はその場からベッドへダイブ、顔を埋もれさせながら、去り際に視通した搭燈の答について考えることにする。

――――私は、悔いてはおりません。

かつての罪を前に、搭燈は図々しくもそう考えのけた。
後悔はしていない。自分で決めたことだと。
責められようとも、罵られようとも、私は己れを恥じません。だから、貴方の示した罰の道も、私は恐れず進みます、と。
憑物が視通した、期待外れの間抜けな返答をした。
馬鹿馬鹿しい、という感想しか、憑物の頭には浮かんでこない。
悔いていない？　自分で決めた？　己れを恥じない？　恐れず進む？
その解答の全てが見当違いであることに、何故気づけないのか。
どうしていつまで経っても、そうやって“逃げ続ける”のか。
憑物には、搭燈の考えなんて理解も出来ないし、したいという欲求も沸き上がってこない。
搭燈という一枚の紙屑に、なんの感情も抱けない。

「っとに、どいつもこいつも勘違いばかりだな。ところで…」

ゴロンとうつ伏せから仰向けに変わって、憑物は部屋の隅に眼をやった。
家具もなにも置かれていない、ベッドが邪魔で置くに置けない無駄

なスペースに、心底嫌そうに声を投げ掛ける。
誰もいない筈の、虚空に。

「そこでクスクス笑ってる怨霊。姿を現さないなら問答無用で視なすぞ」

≪あ、気づいちゃいましたぁ？≫

虚空から返事がきた。
声の次には顔が、手が、足が、身体が、立体のキャンパスに絵の具で色づけしていくような様で人間の姿が現れていく。
ドレッドヘアーに何処かの民族衣装を着た、陽気な雰囲気の男。
口にくわえた煙管からプカプカ白煙を出す、既に死んでいる人。
誰が呼んだか、情報屋と呼ばれている幽霊だ。ありとあらゆる情報を取り揃え、必要とする人間に何らかの対価を貰って受け渡す、『速入速達』を詠う商売人。
死んでいるのに商売が成立するのかは、まあどうでもいいことだが。
今一番に憑物が逢いたくない、逢うと面倒なことになる、その人だった。

≪いや～、お憑かれさんは相も変わらず冷酷ですねぃ。あのぉ……井和木？　さんの壊し方ときたらぁ。普通に“地獄”視せられてた方がまだマシですよぅ≫

憑物の嫌悪を余所に、情報屋は霊体を活かして空中に浮かび、クルクル回りながら終わった話を振り返す。その頃から部屋に侵入して

いたようだ。
≪苛められっ子さんの自殺した時の状況、心境を視せるなんて、俺からしたらそっちの方が地獄ですけどねぃ？≫
「あの程度で壊れる奴に地獄は勿体ないんだよ」
含み笑いと嘆息が交錯する。
井和木の壊し方。
憑物の能力、視通す能力は、対象に強制委託“貸し与える”ことが可能だ。視通した事柄を相手にも視せ、内容は能力者である憑物のみが指定出来る。その間、憑物は能力を失った状態になるのだが、それを補って余りある特筆すべき点が一つ、視通した事柄を“体感”させるというものがある。
井和木に視せたのは別の時間、別の場所で苛められ、それを苦に自殺した少年の状況だ。胸に包丁を一突き、加えて、少年の思考状況も合わせて井和木に体感させた。
自分の感情が他人の感情に侵される。
例えるなら、井和木を赤として自殺した少年を黒とすれば、赤を黒で塗り潰したことになる。
“人格汚染”…自分が自分で無くなることほど恐ろしいことはない。
そういう意味では、情報屋の言う通り地獄といえた。
しかし憑物の見解としては、人格汚染は憑物が視せる“地獄”よりは遥かに劣るものだ。
井和木に地獄を視せずに回りくどい事象を視せたのは、他人の感情に消される程度の精神力、その弱さ、地獄を視せるに井和木が値しなかったから。
裏を返せば、憑物が地獄を視せる相手というのは、分相応な精神を持つことになるのだが、

そんなどうでも良すぎることより、憑物は情報屋に言っておかなければならないことがあった。

≪式神さぁんも可哀想にぃ。よりにもよってお憑かれさんに眼ぇつけられちゃって。やっぱり、あの娘も壊すんですかぁ？≫

「それより情報屋。ちょっと降りてこい」

≪はぃ？≫

上半身を起こした憑物がちょいちょいと手招きして情報屋を呼ぶ。
遊園地のアトラクションにでも乗っているような愉快な動きに発展していた情報屋は止まって、素直に憑物の真正面に、上下逆さまで近づいた。
情報屋はずいっと顔をアップさせて、

≪どうかしまし……≫

メコッ！　と。
憑物の渾身の一撃を顔面に喰らった。
ビクッと情報屋は痙攣する。
憑物は手を退けて、スッキリした面持ちで反応を待つ。
少しして、鼻血を逆さまに垂れ流した情報屋が口を開いた。

≪……痛いですねぃ≫

「ありったけの霊力込めたからな。痛くなかったらもう一回殴ってるぞ」

≪それは良かったですぅ。でぇ、なーんで俺、殴られたんですかぁ

？
≫

「卯月えるだ」

〈弐〉5

情報屋ははてな？　という顔で眼を逸らした。
判りやすい反応だ。完全に憑物を馬鹿にしている。

「やっぱりな、そうなると判っててもイラッとくるんだ。…意味なく変な奴を寄越すな」

憑物が怒りのオーラを放ちながら凄むと、

≪意味ならありますよぅ。屍さん、俺のエリスと同じ年頃で、不運な境遇を背負ってたから不憫で不憫で……ウ、ウ、ウ≫

これまた判りやすい嘘泣き。
憑物は取り敢えず、もう一発分の霊力を右手に込めた。
最後に、情報屋の弁解を聞き届けてやろうと笑顔で訊ねる。

「それが、えるを俺のところに連れ込んだのとどんな関連性が？」

≪お憑かれさんだったら、かあいそーな屍さんを救ってあげるだろうなー、と思いましてねぃ。ほら、彼女の時だって助けて上げてたじゃないですかぁ≫

「あれはまた別件だ」

≪お憑かれさん、ロータリーコンサルタントじゃないですかぁ≫

「…」

≪判りにくかったですかね？　直で言いましょうか、ロリータコンプレックスですよこぉのロリコォン♪≫

「……」

憑物は肺の中の空気を全部吐き出し、首をゴキゴキ鳴らして体勢を整えた。

もう充分だろう。

ここまでだ。

それだけ話せば未練もあるまい。

その下卑た面を凸凹にして起伏に富んだバラエティ豊かな顔に仕立てあげて遺影に華々しく飾り葬式は活火山の近くで直ぐ様遺体を入れた棺桶を火口に投げ捨てて骨という骨を髄々まで焼きつくし情報屋という虫けらにも劣るカスをこの世とあの世とどの世からも抹消して端的に述べるならそうブチ殺

≪おっとそういえばぁ、お憑かれさんに渡さなければならないものがあったんですよぅ≫

すという絶妙のタイミングで話題を変えられた。

いや、話題が変わったくらいで止まる憑物でもないが、同時に情報屋は憑物から離れるだけ離れ、拳の届かない天井に貼りつくという狡猾さを見せていた。

「……別に良いけどな。で、渡すならさっさと渡せ」

ここでグタグタ言うと余計疲れると判断し、憑物は怒りを抑える。

…実はまだ拳に力を溜めたままで、油断して近づいた情報屋を撲殺しようと狙っていたが、察しの良い情報屋は天井を離れず、渡す品だけを落とす形で放った。

≪はぁい、プレゼンツ・フォー・ミィ～≫

「やらねえぞ？」

情報屋の茶目っ気はさらりと受け流して。
落ちてきたのは、先程まで情報屋自身が口にくわえていた、煙管だった。

「……」

≪はいはぁい、これで依頼達成でぃす≫

一仕事終えて喜ぶ情報屋から放られた煙管を無言で受け止める。
憑物は煙管をざっと眼を通して、

「…せめて拭いてから渡せよ」

唾液がベットリ付いていた。
ちょっと気恥ずかしそうに情報屋が、

≪ウフゥ。それをお憑かれさんがくわえたら、俺とディープキスをしたことに≫

「間接の域を出ねぇよ」

一蹴された。
馬鹿は放置しておくとして、憑物はベッド脇にあるティッシュを十数枚抜き取り、念入りに煙管を拭く。だったら水で洗えば良いだろと言われるだろうが、そんなことをしている暇はない。

拭き終わり、これから一服でもするのか、憑物は煙管をくわえる。
煙管の火は渡される前に情報屋が消していたので、火をつける為には刻み煙草とライターが必要だ。憑物は情報屋から二つともくれるよう催促する。

…ようなことはしなかった。

そんなことをせずとも、煙管から薄紫の煙が吹き出て部屋を漂よった。

「…不味」

≪最初はそんなもんですよぅ。煙くて咳き込まないだけマシじゃぁないですかぁ≫

一服した憑物は渋い顔をして、それを見て情報屋があけすけに笑う。
独りでに煙管から煙が出たことに、二人は何ら疑問を抱いていない。
当然だ。
情報屋も憑物も、この煙管がどういうモノなのかを知っているし、視っているのだから。

≪それじゃぁ、そろそろ良いですねぃ。お憑かれさんにも『器』を渡しましたしぃ≫

グッと背伸びをして情報屋が天井から降りてくる。依然、憑物からは離れたまま、用を終えたので帰りますという空気を醸し出して、一言。

≪サクッと、殺しますねぃ≫

サクッと。

それじゃあさようならとでも言う風に。

歩いて五歩の距離も、間にあるベッドも関係なく一瞬で憑物の背後に回り。

特に何かをしたようにも見えないのに、既に何かをしたらしく。

ゴトリと。

憑物の頭が、首から切り離されて畳の上を転がった。

〈弐〉6

≪ウフ…ウフフフ……アッハッハッハッハ……ッ≫

情報屋は笑った。
紫煙が揺らめく部屋の中、人一人を難なく殺して。
ベッドに腰掛けたままの身体と畳に落ちて揺れる頭を見下ろして、
とても愉しそうに笑った。
意思を無くした身体はゆっくり傾いでベッドに倒れる。
口にくわえていた煙管が音もなく外れる。
生命の色を失った生首は無表情だった。
憑物という少年がたった今死んだ。
その事実を視っていたのかどうか、彼は驚きもせず、恐れもせず、
あるがままを受け入れて、

「これだから面倒なんだよ。お前が来ると」

生首が、喋った。
と思えば今度は身体が、頭を欠いた状態で起きて自身の首と煙管を
掴み、立ち上がる。よくよく見ると血が一滴も出ていない。
髪を掴み、ブラブラ揺れる憑物（の頭）を見て、情報屋は腹を抱え
て大笑いした。

≪プーッフッフッフ！　お憑かれさんそれ、最高です！　サイ
ッコーですよアッハッハッハッハッ≫

「笑いすぎだ」

お手玉して下さいお手玉、と情報屋が要求し、ならお前の頭も寄越せと憑物は返す。何だかとっても愉快な二人だった。

ひとしきり笑い終えた後、情報屋は感心したように改めて憑物を見た。憑物は頭を首に押し当て、元通りに戻しているところだったが、

≪いやー、流石ですねぃ。手に取ってすぐに扱いこなすなぁんて≫

「相性が良かっただけだろ。性質的に、俺とこの器はかなり近いし」

≪はぁん。で、それの名前ってなんですぅ？　俺、使えた試しないんで知らないんですよぅ≫

聞かれて、憑物はもう一服し、

「…ピオ・レバイア」

唱えるように、煙管の冠し名を詠み上げた。

「【夢幻】―ピオ・レバイア―だ」

≪夢幻、ですか。お憑かれさんにピィッタリな名前ですねぇ≫

「嬉しくはないな」

≪おやどぉして？≫

「世界には現実しかない」

情報屋はもう一度はぁんと頷いた。きっと理解はしていないだろう。

≪んー、ではではぁ、俺はそろそろ帰りますねぃ。本当はこれを言いに来たんですよぉ≫

今度こそ用が無くなった情報屋は快活に別れを告げた。その物言いから考えるに、情報屋はもう憑物には逢えないことを示している。情報屋の言わんとしていること、それを視通した憑物は、

「帰るのか。向こうの世界に」

≪えぇ、アッチの方も一段落ついたみたいですしねぇ。多分、もうお憑かれさんには逢えないと思いますので、さよならぁを≫

「そうかなら永久にさよならだ。いや残念だな悲しいな。情報屋に二度と逢えないなんてまさに盆と正月が一度に来たみたいだクハハハハ」

感情の一切を込めない見送りをした。

情報屋はニッコリ笑顔で何も言わず、クルリと反転。ベランダの窓をすり抜けて外に出て、

帰るのかと思いきや。

≪あぁっと、そーいえばぁ、もう一つ聞きたいことがありましたぁ≫

ガラス越しに振り返って、思い出したようにまた終わった話を持ち出した。
それは憑物が受け取った、一通の招待状と陰陽師のことについて。
もう寝るのは諦めて暇を潰そうか、しかし無趣味だから潰せるものがないなどうしよかとつらつら考えていた憑物は、仕方なく、面倒そうに、話に応じた。

≪お憑かれさぁん、ホントに招待を受けるんですかぁ？≫

「嗚呼」

≪必要ないのに？≫

「…」

ストレートな言及に、憑物の口が閉じる。

≪管理者との約束はもう守らないんでしょぅ？　ならぁ、お呼ばれしたからって、行くことないですよぉ≫

「それは」

≪やっぱり、忘れられません？≫

「……」

≪それともぉ、他に理由があるとか……≫

「情報屋」

弁舌なドレッドヘアーに向き直り、言葉を遮った。
見た目は今までと変わらず、気だるげな様子の憑物は、

「そんなに“私”に壊されたいのか？」

絶対零度も下回る冷たい声で、
全てを射抜く視線で、
何者をも一掃する威圧感で、

硝子一枚隔てた情報屋という存在を、呑み込む。

それでも。

≪…口が過ぎましたねぃ。じゃまたぁ、何処かで逢ぁいましょ～≫

圧倒されて尚、情報屋は剽軽な調子を崩さずに、もう一言だけを残す。
いつかの天邪鬼が放った言葉を、口にする。

≪まだまだ死んだら駄ぁ目ですよぅ、お憑かれさぁん≫

「死んでるお前に言われたくない」

部屋には、一人だけが残された。
此処にはもう暗殺者も、式神も、幽霊も、管理者も、誰も居ない。
仮面を剥いだ一人の道化師しか、いない。
道化師は月光に照らされ、幽霊の言葉を反芻し、考えに耽る。

（必要ない、か。判ってないな情報屋。それを言うなら、この空間でお前と逢う必要も無かったよ）

陰陽師の招待。
行われる死戯。
式神との過去。
天邪鬼を連れて。

（ずっと待ち望んでいたんだよ。けれど、同じくらい、ずっと来なければ良いとも想っていた）

あの日、あの刻。

かつての神童を壊し、
天邪鬼へと至った。
その先を、視る為に。

（明日だ）

あの日、あの刻、視ることの出来なかった事柄を、確認する為に。

（明日、結果が判る。明日、答えが表示される）

選べ。

選択しろ。

二つの内、一つを。

（その刻、俺は……）

最たるものの、どちらかを。

（私、は……）

サア、エラベ。

サイアクトサイゼン、ソノドチラカヲ。

クネンチカクモ、マッタンダ。

エラバナケレバ、ナラナイ。

ダカラ、エラボウ。

フタツに、ヒトツ。

セイカ、シカ。

イカスカ、コロスカ。

ミルカ、ミナイカ。

ミトドケルカ、メヲツブルカ。

〈弐〉6（後書き）

〈弐〉赤紙と招待状　の要点！

その一、
書き直し前と後の管理者が別人。
一応補足すると、第一部の〈？？？〉に出てきた管理者が後任者、
第二部で過去の憑物と接点を持つのが前任者。
書き直し前の本文に書いてたけど、この管理者は視る眼シリーズでは
あまり話には関わりません。あしからず。

その二、
幽霊以外のオカルトキーワードが出てきた（式神とか陰陽師とか）。
もう少ししたら天使も出てくるから、ジャンル通りファンタジック
さが増すと思う。

その三、
脇役・井和木が本当に脇。てか、可哀想。せっかく名前も付けられ
たのに。名前ついてて脇っていうのは、やるせなくなると思いませ
ん？。

その四、
情報屋が基本、小説の世界観に囚われていないから自由に書けて楽
しい。…ええ、駄目なのは判ってます。ちゃんと縛れって話です。

その五、
視る眼シリーズを『シリーズ』にすると決めた時から出そう出そう
と決めていたので悔いはないけど、自分のＨ・Ｎをキーアイテムに
名付けるのはやっぱり如何なものかな～と後悔。フフ、矛盾してる。

その六、
なんの問題もなければこのまま〈参〉濃霧に紛れる囁き　を書くんだけど、同時執筆している自小説が完全停止しているし、後弐遍を書けば終わりなので、そっちを優先すると思うので先に謝っときますご免なさい。

それと、敬語でなくなっているのが気に障ったらご免よ。その場の気分だから気にしないで。

〈参〉1　濃霧に紛れる囁き

深夜二時過ぎ――――。
街を覆っていた雲が流れて山々に掛かり、山中に濃い霧を漂わせ始めた時分。
街から遠く離れ、一般道路からも外れ、道なき道を進むこと一時間の山奥。人の出入りに乏しいであろうその場所に、小さな神社が建てられている。
神社に名はない。
その存在自体、知る者は皆無と言えそうな程誰にも知られていない神の社に、極めて珍しく、三人の来訪者の姿があった。

「やーっぱ駄目だ。全然思いつかねぇ」

一人は猫背の、黒いパーカーを着て頭を隠している茶髪の男。先程から一人で喋り続け、時折他の二人に話し掛けたりしている。

「なーんであんたらみたいな有名所と一緒に俺が呼ばれたのかがさーっぱりだ。だって俺は実績もそこそこの無名だぜ？　あんたらとじゃ、格が違いすぎるよな？　そう思わねぇかい、遭馬（そうば）　逹（たつ）さんよ」

「……」

茶髪の男が話し掛けたのは、白い袴を着込んだ時代錯誤の男。腰には柄、鍔、鞘、総一色の黒い刀を差し、茶髪の男にはまるで無関心で沈黙を貫いている。

「まあ、あんたらって言っても？　そこの巨人さんがどなたかは知らねーんだよな」

「・・・」

そう言う男の視線の先には、灰色の布で全身を覆い隠した全長三m を越える巨体。男なのか女なのかも判らないその人物は、淡い灯りが揺れる石灯籠の隣で、袴の男同様に静かに佇む。

三人はある職業柄、ある依頼の元に、名無しの神社に参じていた。今は残る最後の一人と、依頼主となる社の神主が来るのを待っているという状況にあった。
三人は社の前の境内で、茶髪の男だけが暇潰しに一人喋り、他二人は黙々と不動の体勢で一時間弱を過ごしていたが、

「…なあ、遭馬さんよ。やっぱりあの巨人って『食人鬼』なんかなー？　此処に来る前にそんなような話聞いたんでさ」

「…、」

不意に茶髪の男が放った一言で、袴の男―――遭馬達が初めて茶髪に関心を持った。

「やっぱりなー。そうじゃないかってずっと疑ってたんだよ。まさかあの異常者まで呼ぶなんて、今回の依頼した奴の頭はかなりブッ飛んでるよなー」

「……マン・イート・ゴブルは、来ない」

「おろ？」

境内で顔を合わせて以来、初めて遭馬が喋ったことに茶髪は驚く。そして反応がきたのを喜んで、嬉々として遭馬に捲し立てた。

「食人鬼―マン・イート・ゴブル―が来ないってのは？　食人鬼のことで何か知ってるのか？　教えてくれよ。あんたは一体何を知っているんだ？」

「…、偶々日本に来ていた食人鬼に依頼人が直接訪ねたらしい。が、食人鬼は依頼を断った。『女の肉が喰えないなら用は無い』と言って」

渋々、というよりは嫌々、といった感じで遭馬は話す。迂闊に反応してしまったが、遭馬には会話をする気は全くないようだ。話し終えるとすぐにそっぽを向いてしまった。
これ以上話し掛けるな、と言わんばかりの遭馬の態度に、しかし残念ながら茶髪はそのことに気づかない。会話が成立したのがそんなに嬉しかったのか、茶髪は尚も遭馬に話し続ける。

「はー…。人を食う異常者っていうもんだから、もっと無差別だと思ってたわ。女の肉ねー……、美味しいと思うかい？」

「…」

「まあ、人を食うって時点で答えはノーだよな。ま、別の意味で食べるってんなら、大いに賛同するところだけど。遭馬さんもよ、目の前に美女がいたら食いつくだろ？」

「……」

話が下世話な方向に進み始めた。茶髪はそういう話が好きなのか饒舌になって、その手の話を嫌う遭馬はさりげなく茶髪から離れる。そして茶髪が独り、先程までの独演会を始めようとして、

「…何だこりゃ。エロとサムライとゴーレムってどんだけ愉快なパーティだよ。こりゃ開始十分で雑魚に瞬殺だな」

霧の向こう、境内まで続く石造りの階段から最後の一人が、場の混沌さに辟易しながら歩いてきた。

〈参〉2

遅れて到着した男は、金髪青眼、赤と黒を基調にした柄のジャケットを着ている。階段から社近くの三人に向かう男に気づいた茶髪は、遭馬の傍を離れて男に注目した。

「おーっと、噂の切り裂き魔さんのご到着だ。よお、あんたの噂はかねがね聞かせて貰ってるぜ。カティル・ザ・リッパーさん」

「ぁア？」

茶髪は軽々しくジャケットの男――――カティルの名を呼んで絡み始めた。この男、基本誰かに構っていないと仕方ない性格らしい。遭馬の次の標的になったカティルは、茶髪に話し掛けられてとても迷惑そうに、あからさまな嫌悪の表情を取ったのだが、茶髪はお構い無しだった。

「最近ロンドンを賑わせて『切り裂きジャック』の再来なんて呼ばれてるあんたと仕事が出来るなんてなー？　ハハッ、俺興奮しっぱなしだぜ」

「…あー、何なんだろなテメェ」

「なあなあ、あんたの英雄伝、是非聞かせてくれよ。そこのお二人さん無口でさー、ずっと暇だったんだよな」

「知るかよ」

「そう言わずにさ。今まで何人殺したんだ？　ネットのニュースで

観た時は百人近くいたよな。その他にもいるだろ、発見されてない奴とかさ」

「…」

「“コレクション”も相当溜まってるんじゃないか。いや俺には理解出来ねーけど、あんなもん集めてるあんたとしては、どう思ってんのかなー？」

「……ハァ」

会話を求めている筈なのに、一方的に喋るので話にならない。カティルは茶髪の扱いに困り、溜め息混じりにジャケットの懐に手を伸ばした。そこにある取っ手を掴んで茶髪を一瞥、無表情のまま引き抜こうとする。

「皆様、此方に御注目下さい」

が、寸前で社の方から声がして手は止まった。
茶髪は喋るのを止め、遭馬は視線だけを社の奥に、巨体は反応する素振りも見せない。最後にカティルが手を引っ込めたところで、社の壇上に立つ赤色の式神が丁寧に頭を下げた。

「本日は夜分遅くに御足労頂き、ありがとうございます。これよりこの社の主、丕阿波（おおあば）　李稔（りねん）様からの御言葉があります。御静粛に」

言い終わりにまた一礼、すぐに脇に退いて顔を臥せる。その間に茶髪が、

「お、可愛いじゃん。もうちょい年齢が高かったら狙ったのになー」

などとほざいたりして。

「『切り裂きカティル』も指定時間外だが着いたな。多少の遅延は見逃そうか」

社の奥から紫紺のを纏った四十代後半の男が現れ、境内にいる四人を見渡した。

男は歳より深く刻まれた皺を震わせ、周囲の霧を打ち晴らす高らかな声で挨拶する。

「急な呼び出しに応じてくれ、感謝しよう。この場で初めて対面した者もいるだろうから、先ずは自己紹介だ。———私の名は丕阿波李稔。これから明日の明朝までお前達の主となる者だ。名は覚えたければ、覚えていろ」

不敵な笑みで、大敵な物言いで言い放った。

四人は其々思い思いの反応を示し、丕阿波李稔は構わず続けた。

「さて、こんな夜更けに呼び出したのは他でもない。件の催しのスケジュールが決まったのでその打ち合わせをしたい。…のだが、悪いがその前に予定を変更だ」

「変更？」

茶髪がいち早く問い返す。

李稔はそちらへ頭を動かして、

「おいおい、こんな山奥まで人呼びつけといて、まさか依頼を無しにとか言わないよな」

「そのまさか、だ。先方がこちらの要求を拒んでな、数を減らすか、枷を付けろと言ってきた。ということで…」

近場の店にお使いでも頼むような気軽さで、茶髪と他三人に言った。

「数を減らそう。各自、自分より劣るだろうと判断した者から順に“殺せ”」

「…ハ？」

聞いて、口をあんぐりと開ける茶髪。李稔の言葉の意味を理解するのに少し時間を要し、その間にカティルと巨体は、

「ハァン。そいつはなかなか愉快だなァ」

「・・・、」

懐に携帯する吊り鐘状の刃のナイフを今度こそ取り出して、もう一方はやはり動かないまま静観した。

カティルが凶器を出したことで茶髪は慌てる。李稔の指示通りに動くなら、真っ先に殺されてしまうのは、

「お、お、お、おい！　待て待て待てよ、この中で一番弱いっつったらそりゃ……ッ！」

「つまらない、余興だ」

チン、と。
境内に鍔と鞘が当たった音が鳴った。
血相を変えて騒いでいた茶髪は振り返って見ると、離れた場所にいた遭馬が腰の黒刀に手を掛け、フッと息を吐いている。
おかしい、と茶髪は思った。遭馬は柄を握ったままどうすることもなく、うんざりした様子で背を向ける。
まるで何かをし終えたみたいに。
手間の掛かる用事を済ませたみたいに、刀から手を離して李稔に問い掛ける。

「他の二人も、殺せば良いのか？」

他の、二人も。
恐らく、カティルと巨体を指している。
ではもう一人は？

茶髪の男は、自分は、遭馬が“刀を抜いて鞘に戻して”、その後どうなった？

「は…ハ？　……ぁ、」

気づいた時には、手遅れ。

たった一センチ、それだけ身体を動かしただけで変化が現れる。
途端に下半身から感覚が消えて、上半身はグラグラ揺れて傾き、

「ハ、ハ…ァ、ぁァァアアアアアアアアアアアアアアアアア！？？」

茶髪の男の半身が落ちた。
残った半身もすぐに後を追い、一緒に石畳の上に転がる。切り口から大量の血液が流れて男のパーカーやパンツを濡らし、男は遭馬に何をされたのかも判らないまま、こと切れた。

〈参〉3

「距離すら断つとは、聞きしに勝る居合だな」

殺人を命令した李稔は感心混じりに言って、傍らの搭燈は誰にも気づかれずに眼を伏せた。巨体は説明するまでもなく、目の前で達人技を見せられたカティルは、李稔に二言三言聞く。

「李稔、つったか。さっき数を減らすか枷をつけるかって言ったがよ、枷をつける方の選択はねぇのか」

「というと？」

「順番でいやぁ、次に殺されんのは俺だからよ。それが駄目なら、俺はさっさと帰らせて貰う」

「そうか…。では遭馬達、お前はそれでいいか？　複数人雇えば、報酬も分配することになるが」

「構わない」

「ふむ。では、問題がなければ依頼について説明しよう」

そうして境内に集まった面々は声低く話し始めた。
一つの死体を築き上げて、その異常を正常として受け入れ平然とする闇の住人達は、包み込む霧の内側で囁きを交わした。

話は長くも短くもなく、一時間程で終わった。
催し物の行われる時間、其々に行って貰うこと、全て終わった後に報酬を支払うということ、加えて、付ける枷についても多少論議した。
仕事の話が終わると、三人はさっさと階段を降りて帰っていった。
三人を境内の片隅から見送った李稔と搭燈は、しばらく無言の後に、搭燈から疑問の声が上がった。

「李稔様。本当にこの方法で『視通す者』を殺せるのでしょうか」
主に対して不信を抱くのは式神として失格だが、搭燈は聞いた。“本当にこんなやり方でアレを攻略出来るのか。運命すら操れる力を持つ存在に、打ち克てるのか”。
その問いに李稔は、
「お前が懸念する通り、私の考案した企画は不安材料が多い。もっと考えを煮詰めて、策略を張り巡らせれば良いだろう」
「それなら」
「だが奴は『視通す者』だ」
獰猛な笑顔で、血走った眼で、宣言する。

「策略も、戦術も、視通されればそれまでだ。奴に勝つには、そんな陳腐なものなど足下にも及ばない、厳然たる“現実”でなくてはならない。誰しも、現実には抗えないものだ。それはお前が一番良く知っているだろう、搭燈？」

「…」

搭燈は黙る。

李稔が言うのは“あの少年”との過去のことだ。搭燈と、搭燈の片割れが初めてあの少年と出逢い、現実を教えられた時のこと。

どうやって調べたのか、李稔は両者の関係を知り得ていた。その上で、意地悪く聞いてくる。

「久しぶりの再開だったのだろう？　諸々の報告は受け取ったが、お前自身の感想は聞いていなかったな。どうだった、懐かしの視通す者は」

その返答に、搭燈は感情の色を見せず、

「…御変わりありませんでした。昔のまま、何処も変わってなどおりませんでした」

「変わりない？　報告には、アレは流れに身を浸すのを止めたとあったが」

「そうではありません。そうでなく―――本質は、何処も変異しておりませんでした。アレは、」

超然なる存在のままでした、と言い添えた。

畏怖の念を込めて。
畏敬にも取れる、口調で。
昔も今も、あの少年は変わらず達観して搭燈を視ていた。搭燈の髄の髄まで視通して、選択を与えた。
恐ろしく、それ以上に“嬉しかった”。

“彼は私に選ぶ権利を与えてくれた。選べる余地を残してくれた。それは過ちを犯した搭燈にとってどうしようもなく救われる、神からの慈悲に等しかった”。

「――――最悪です。最悪のままです。あの方は今昔変わらず、最悪に最悪を重ねた“災悪”でした」

「災悪、か」

搭燈の告白に李稔は薄く笑う。
何を想像しているのか搭燈には判らないが、正常なものでは無いだろう。
彼は過去に視通す者によって裁かれた人間だから。
視通す能力によって精神を壊された、狂乱者なのだから。

「明日だ……明日に、全てが決着する……そうだ、明日……奴を死に追いやるのだ……」

ブツブツと精神の糸を千切るような呟きで李稔は己れの世界に閉じ籠ってしまった。こうなると誰が話し掛けても無反応になってしま

うので、搭燈は憮然としながら主を置き去りにし、茶髪の男の死体を片付けて社の方へ引き返した。

〈参〉4

李稔が脳内妄想に囚われて数時間後のこと。

「―――ッ、……！　～～～～～～ッッッ」

「……ん？」

濃い霧のまま朝日が昇り始め、やっと正気を取り戻した李稔の耳に聞き覚えのある声が届いた。声の主は相当機嫌が悪いらしく、怒鳴るような勢いで悪態を吐いている。

「……ッッッたれぇ！！　あの黒髪骸骨影薄野郎がぁ……次に逢ったら裂っき裂きの裂っき裂きにしてやんよぉ！！」

「…累李か。何をそんなに荒れている」

黒髪の少女が吠えながら石段を上がって姿を現した。李稔は全力疾走でもしたかのような汗だくの少女を呼ぶと、、黒革のジャケットの胸元を全開にした（下に何も着けていないのでかなり危うい）状態の彼女は李稔をガン見し、苛々の絶頂期ですと言わんばかりに怒鳴った。

「アンッタには関係ないわよこのクソジジィ！！　根暗が話し掛けんじゃないわよ、たく…」

「…」

彼女は口汚く罵って早足に社へ向かって歩き去っていった。ズンズ

ンという擬音が聞こえそうな大股で。
怒りの捌け口にされた李稔はほんの少しきょとんとして、気を取り直すと、アレももう少し淑やかさを養わなければいけないな、などとぼんやり考え、

「そういえば、奴も今回の催しに出たがっていたが……、本人も忘れているようだし、良いか」

酔狂で拾ってやった、家を出て行く宛のなかった姪っ子のことなど、放置することにした。

◇◆◇◆◇

「だーからに〜、ヌードリアンにチーズ星人が侵略したんなら、マスタード防衛省も乗り出すべきだと僕僕ちゃんは思ふのさん」

亞木姜示が大真面目な顔で言った。

「カップヌードルにマスタード入れて美味い訳あるか。それよりマヨネーズだろうが、マヨネーズ。どんな食品も入れただけで美味に

なる魔法のスパイス、俺は断然マヨネーズだ」
憑物も真顔で返した。亞木はぷひーん、と鼻を鳴らして反論する。
「ツッキーのマヨラースパイ大作戦は病みつきだにー。でもでも、マスタード少将の活躍もなっかなかに見逃してはならないロマンスなのさん！」
「例えば？」
「ピリッと痺れちゃうメロメロパーンチ」
「辛いのか甘いのかどっちかにしろよ」
「ヒハハ、メロンパンナちゃんは僕僕ちゃんの白い恋人だからに～。アンコのヒーローには負けてられないのさん」
「要するに、マスタードは美味いからヌードルにも合うってことか」
「ヒハハハハ！　さっすがツキツッキー、話が早ーいぜーい」
「だが譲らん」
「ハヒ？」
「いちマヨラーとしてお前の意見に賛同することはマヨネーズに対する冒涜だ。俺は断固戦い抜くと宣言しておこう」
「ヒッハハハ。のぞみちゃんも挑むところだぜい。とろで憑物ー？」

「何だ？」

「まだまだ真っ直ぐ？」

「あー…、後二分四十一秒したら左に直角に曲がれ。それから９ｍ進むとＳ字カーブがあるから、その時にまた教える」

「りょっかーい。…あ、ワンモアプリーズ」

「今度は何だ？」

「ひしょっちーが文句ありげだよん」

会話のリレーが途切れ、憑物は後部座席に座る宰蓮寺氏乃を見た。宰蓮寺はマリアナ海溝よりも深く険しい顔つきで眼を閉じ、指で眼鏡のズレを直している。
憑物は宰蓮寺の無言の姿勢に首を傾げ、どうしたのか訊ねた。

「何だ氏乃、言いたいことがあるならしっかり声に出して言えよ。俺はいちいちお前の心理状況を言い当てるつもりはないからな」

「……言いたいことは、一つだけです。お二人の地球外言語に関しては、触れたくありませんので」

ふう、と溜め息を吐いて、意を決して宰蓮寺は聞いた。

「何故、わたくしが後ろの座席に座り、亜木姜示様が運転し、凪臣様が道案内をしているのでしょう」

「霧が出ているから」

憑物はにべもなく答えた。
窓の外を見れば、一面は真っ白に埋め尽くされて視界は最悪。街を離れて山間近くでこの霧が発生、引き返しましょうと宰蓮寺が提案すると憑物は亞木に運転しろと言い、見えない視界は俺が視て伝えると助手席に座って、
この状況が出来上がったのだった。
しかも三人が乗っているのは高級外車、構図的には宰蓮寺が車の所有者で金持ちに見えなくもなくて本人の焦燥感に拍車を掛けていた。
宰蓮寺は言う。

「この車は凪臣様のお父上の物であり、わたくしはその方の秘書兼執事をしているのであって、この席に身を置くというのは自殺にも等しいのですが」

「うん、後で親父に電話しといてやる。あんたが気に入ってる革の上に氏乃がふんぞり返ってたよーって」

「ヒハハハハ！　避暑秘書っち大ピーンチ」

「……」

明日の自分に未来はないのだろうか、と鬱になる宰蓮寺だった。

お詫び

どうも、いつもいつも見捨てずに読んで頂き、ありがとうございます。夢幻童子です。
本日は、読者の皆様方に残念なお知らせをしなければなりません。
当小説『視る眼を瞑ります』を初め、過去『視る眼を、貸します』、上記二作の話と世界観を共有させるつもりだった（いやさせていた）『桃喰鬼〈トウクウキ〉』を削除することにしました。
ここまで世界を広げて中途過ぎるし半端ないことこの上ないんですが、最近は私事で忙しく、状況的に小説を書いていられません。
それでも小説を消すことはないんじゃないか、とも思ったんですが、自分は少し小説から距離を置いた方がいいのでは、と無い頭で考えました。
何より、

馬鹿なことを書き過ぎて小説がほとんど誰にも読まれていない！

評価は良いとしてもせめて感想くらいは欲しかったけどそれすらない！！

…本音です。
判ってます。判っていますよ。判るを二乗して三分の一に割って六乗した後に十二でまた割ったくらい判りきってますよ。

卑屈です。
卑しく屈んで卑屈です。
屈んだまま立ち上がれません。
ちょっと、本気で悩んでます。

これ以上小説書き続けるのって、どうなんだろ―――、て。

どうでもいいですか。どうでもいいですね。
こんな不義理なことばかりするから感想貰えないんですよねそうですよね。
でも仕方ないんだ（開き直りますよ？）。私事が忙しいというのも事実だし、正直、客観的にみて自分の小説って面白いのかどうか判らないし。
それを確かめる術である感想はほぼからっきし……。
うん、少ないながらに書いて下さった人達には本当に感謝してます。例えそれが批判でも、自分が間違っていると思ったから注意してくれたのだと思うし、関心なければそもそも感想自体書かない訳だし。感想を下さった方々、今なお読んで下さっている方々、本当にありがとうございました。そしてすいません。夢幻童子は想像以上にヘタレでした。
この謝罪文の掲載から一週間内には片付けようと思います。夢幻童子も、退会はしませんけどしばらく顔を出さないかと。
今一度申し上げます。本っ当に中途半端ですいませんでした。今度小説を書くことがあったら、必ず最後まで書き上げたいと思います。
いや書き上げます。
少し長くなりました。それでは、またいつの日かお逢い出来れば。

追記

さっきですが、小説を削除するに当たって何か注意事項あった気がして調べたら、掲載小説はなるべく消さないようお願いされてました。

…前に一回消したことあったのですっかり忘れてた。前言撤回します。小説はこのまま残します。

何処までズボラなんだろうな自分…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7018d/

視る眼を、瞑ります

2010年10月11日22時29分発行